860
28
43

四

前田流節付 平家物語 四

860-43

大庭早馬

入道逝去

經之嶋

横田河原合戰

ガラス使用

大庭早馬

拾読

さる程に九月二日の日相模の国の
住人大庭の三郎景親早馬を以て
都へ申けるは去る八月十七日伊豆の国の
流人前の右兵衛佐頼朝舅北条の四郎
時政を遣はして伊豆の国の目代和泉

大庭早馬

大庭早馬

の判官兼隆を山木が舘にて夜うちに
討候ひぬ　呂　その後　下音　土肥土屋
岡崎をはじめとして三百余騎石橋山に楯
籠て候ふ所を　上音　景親味方に志
ざしを存ずる者ども一千余騎を引率
して石橋山に押寄てさん〴〵にせめ候

程に兵衛の佐頼朝わづか七八騎に討なされ
土肥の杉山へ逃籠り候ひぬ畠山五百
余騎で味方をつかまつる三浦の大助が子ども
三百余騎で源氏方をして由井小坪
の浦て攻戦ふに畠山軍に負てむさ
しの国へ引退く　呂　その後

ガラス使用

下音　畠山が一族河越稲毛小山田江戸葛
西　上音　是を始めて惣じて七黨乃
兵どもおなじく起り合都合、其勢二
千余人三浦衣笠の城に押寄て一日一夜
せめたりけるが大助討れ候ひぬ子共はこれ
加里濱のうらより舟に乗りて安房
上總へぞわたりぬしても人中ハ進

入道逝去

口説　同じき二十三日院の殿上にて俄に
公卿せん議あり前の右大将宗盛
卿の申されけるハ先年坂東へ討手
ハ向ふたりといへどもさせるし
出したる事もなかりしハ今度ハ宗盛

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43　ガラス使用

らけるハ凡て東国北国の凶徒等追
討すべきよし僉議せられけれバ諸卿
色代して宗盛の卿の申条當く
去うゆゝしハおんぜしとぞ申されけれバ
法皇大きに御感ありけり公卿殿上
人も武官に備はりしも弓箭に
携ハらんずる程の者一人ものこらず
前宗盛の卿を大将軍として東国
北国の凶徒等を追討すべきよし仰せ
下さる同じく廿七日首途して既に
打立んとしける夜半より入道
相国違例の心地とて、とゞまらせ給へり

同しき廿八日入道重病をうけ
給へバ京中六はら騒動しけるは
（コハリナケ）すはしつる事よとぞ人々さゝ
やき合へりける　（白声）　病付給ひし
日よりして湯水ものどへいれず身の
うちの熱さする事は火をたくがごとく只
宣ふ事とてはあた〳〵と斗なり臥
給へる所四五間が内へ入る者熱さ絶
難し餘りに熱さの堪難さにや比叡
山より千手井の水を汲下し石の舟
にたゝへてそれに下りて冷給へバ水沸
上りて程なく湯にぞ　（ハツミ）　成にける

口説 若やとて筧の水を任せたれば石や
鐵〇なんどの燒くるやうに水ほとばし
つて寄つかず当る水は炎となりて
もえければ 下ケ 黒煙殿中にみちて炎
うずまきてぞあがりける 中音 是や昔
法藏僧都といひし人閻王の請にお
もむいて母の生所を尋ねしに閻王
あはれみ給ひて獄卒をあひ添て焦熱
地獄へ 中ヲリ 遣はさる鐵の門のうちへ
差入て見れば流星なんどのごとくに
炎空へ立のぼり多百由旬に及
けんも是には過じとぞ見えし

ガラス使用

口説 また入道相国の北の方八条の二位
殿の御夢に見給ひける事こそおそろ
しけれ猛火のおびたゞしく
もえたる車の主もなきを門のうちへ
やり入れたり二位殿夢のうちにあれは
いづくよりぞと問ひ給へば閻魔の庁より
平家太政入道殿の御迎ひに参りと申
車の前後に立ちたる者を見ければ或は
牛の面のやうなる者もあり或は馬の面
のやうなる者もあり車の前には無と
いふ文字ばかり見えたるくろがねの
札をぞ立てたりける二位殿はあれは何の

れども同じ人が南閻浮提金銅十六丈
の盧遮那仏焼亡おはしまするその
罪によつて無間の底に沈み給ふべき
よし閻魔の庁にて沙汰候が無間の
無をば書かれつれどもいまだ間の字をば
書かれぬなりとぞ申ける二位殿ゆめ
覚て後 下ケ 人に語りたまへば聞人みな
身の毛よだちけり 折声 霊仏霊社へ
金銀七宝をなげ馬鞍鎧甲弓矢
太刀刀に至るまで取出し運び出していのら
れて祈の申されけれどもしるしも
なし 長下ノ 呂 されど 下音 男女の公達

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-43　ガラス使用

速論抱かさしはじめて翫さかれしき
合也けり　口説　同二月二日の日二位殿
熱さ堪へ難けれども日にそひて頼み少なく
見へさせ給ひしが御枕により泣く宣ひけるハ
未何事にても思し召し置かんずる事あらば
すこし物のおぼえさせ給
時仰せ置けとぞ宣ひける入道相国日
来はさしも勇ゝしくおはせしかども
今は力も衰へ給ひしが世に苦しげにて
息の下にて宣ひけるは愚老は保元平
治より以来度々の朝敵を平げ勧賞
身に余り、忝くも一天の君の御外戚と

かくて丞相の位に至り栄花既に子孫
に及ぶ思ひ置ることとては今生に一つも
無し但し思ひ置事とては入道が一期の
うちに頼朝がかうべを見ざりつるこそ
口惜しけれ我いかにもなりなん後仏事
孝養をもすべからず又堂塔をも建
べからず先鎌倉へ討手をつかはして頼
朝がかうべを切つて我墓の前に懸さ
せよまでぞ思ひつると宣ひけるこそ恐
ろしけれ若や助かると板に水を沃て
ふしまろびけれども少しも助からざりけるに
悶絶しければ閏二月四日の日　下ゲ

悶絶躃地して終にあつち死にぞし
給ひける　中音　馬車の馳ちがふ音
は天も響き大地もゆるぐばかりなり一
天の君万乗の主のいかなる御事まし
ますとも是にはいかでか　中ヲリ　まさるべき
今年は六十四にぞなり給へる老死と
いふべきにはあらねども宿運たちまち
につきぬれば神明三宝の威光も消
大法秘法の効験もなく諸天も擁
護し給はず況んや凡慮においてをや
三重甲　身に替り命に替らんと忠を
存ぜし数万の軍旅は堂上堂下に

並居たまへども　甲　是は目にも見へず
ちからにもかゝはらぬ無常の殺鬼をば
暫時も戦ひ返さず　下リ　又帰り来
ぬ死での山三途川黄泉中有の旅
の空には唯一人こそ赴かれ　中音
けれ日来造り置れし悪業斗
や獄卒となりて迎ひに来りけん
あはれなりし事どもなり　初重　扨
しもあるべき事ならねば同じき七日
の日愛宕にて烟りとなし奉り骨
をば円実法眼頸にかけ摂津の国へ
下り経の嶋にぞ納めける　初重
中音

さしも日本一州に名をえし威をふるひし人の形迄も今ハ一時の烟となりて光をとしに立のぼりかゞねハ惜しやまゝいてし浪の上にたゞよひつ空しき土とぞなりましける

經の嶋

口説 寿永の秋不思議のことありけり平家の人々今は都をちりがえて絶ゝまてりける西八条殿も去る夜俄に焼けければてらゑ哉なかまし何者のしわざにやありけん放火しとぞきこえしまことに夜の

夜半斗六波羅の南にあたつて人なら
バ二三十人が声して嬉しや水なるは
瀧の水といふ（コハリ上リ）拍子を出して
舞おどりどつと笑ひなんどしけり
（中音）さんぬる正月には上皇かくれさせ給
ひて天下諒闇になりぬ纔中一両月
を隔てて入道相国薨ぜられぬあさまし
かりける世の中の悲しみいへんが[illegible]べき
（白声）いか様にも是は天狗の所為にて
[illegible]まで六はらの[illegible]松の[illegible]
[illegible]院の御
所法住寺殿は平家の悪行に依て

廿一去年ハ院も御しせありて法示郎り
備前の前司基宗といふ者あり彼基宗
がおもしろかりけるの大酒を好て有り
集まり娘見ハかゝる折節に音頭せんとて
吾のみが浮月ま吾許て中しかハ　ハと
舞都どもりのみ哉り　口説　六そしの巴

ども筆に書かねて百餘人ばかりし押
寄て源氏勢ども二三千人かしめおしよせて六
はらへおしよせて平家の者共家盛の内
大庭をさして源氏勢共大庭へ向ひ振を
るの子細を問ふに家にも其推まで
吾許へんどの者を為ちふまるべき

ガラス使用

にけりぼして皆切られけり人の私さる
跡には朝夕に経を読し例時懺法
読すハ九のあひ七日迄でもけし経を記
せ過て後ハ卿佐仏経供養をいとなみ
といふ事もなく朝夕ハ唯宰合戦の
いとなみの外ハまた他事なかりしとぞ見え
たりける兄ハ家経の末葉の那須が末を
られてけれども議にぞ凡人とも都へ参
るゝども参りけり日吉の社へ参りつゝ
しかれハ当家他家の人々多く仕へし
南都摂録の後の春日の御宗氏
人なんどやしとも是にはいかでかまさる

再さいたんし人なりける又に何よりもめでたし
摂津の国和田の御崎に経の島築いて
上下往来の舟の人の世にわたりまでも
ばらひなからしてぞ同築されたり経島は去る
応保元年二月下旬に築始めしまいり
けるが同じき八月二日の日俄に大風吹
大浪立て皆失ひてき同じき
年三月に阿波の民部の大夫成能を奉
行にて築かせられけるが人柱立
るべきなんど公卿せんぎありしかども
それは中々罪業なるべしとて石の面
に此石に一切経を書て　初重　語り

ガラス使用

せゝ退てつりの旅なるとも 須の作とハ
谷有りれ

横田河原合戦

口説 八月七日の日官の廰にして大仁
王會行ハ是ハ将門追討せられし
之例とぞきこえし 九月一日の日純
友追討の例とて 鐵の鎧甲をハ伊勢
太神宮へまいらせらる勅使ハ祭主神

黄田河原合戦

祇の権の大副大中臣の定高卿を
立て近江の国甲賀の駅より病ひ付
ゐて伊勢の離宮にして死ぬよつて
大元の法承つて行ひける降三世の
大阿闍梨大行事の彼岸所にして
寝死に死ぬ　コハリ上ゲ　神明も三宝

も御納受なしといふ事いちじるし
白声　又調伏の法うけ承つて行ひ
ける安祥寺の実玄阿闍梨が御巻数
を進じたりけるを披見せられけるに
平家調伏のよし注をしたりけるぞ物を
詰しけれ是いかにとし仰せけるが朝敵調

ガラス使用

此の由緒なる涼しく当世の袖を
見るに平家をうらみ朝敵と見へて候
まず彼を調伏し何の益やあるべきと申
さ法師武程形の死罪流罪かうし
是を見るに有しか共急劇の大小事に
手縁あつて法師は法滅もなきのみか

平家又代々源氏の代に勝れて滋繁之
ありけは由かく平中は道に深く厳神
妙形ありし盛しとあいて其の体の勧賞
小ハ縁に聞きありてしかとも時のへし閑
じ紀十二月廿四日中宮院号蒙らせ
給ひて建礼門院と申しけるに上幼

主の御時母后の院号是始めとぞう
けたまはる去程に今年も暮て養和も
二年に（いりと）なりにけり　口説　節会以
下常のごとし二月廿一日太白昴星を
をかす天文要録にいはく太白昴
星をおかせば四夷起るといへりまた
将軍勅命をかうふつて国の境を
出つとも見へたり二月十日の日除目行れ
去程に至て平家の人々大略官加階
し給ふ四月十五日前の権少僧都
顕真日吉の社にして如法に法華経
一万部転読せらるゝ事ありけり御結

綸の爲にて法皇も御筆なりけりとき
御看の中に都しありけるやらん一院山門
の大衆に仰せて平家追討せらるべき
よし国々へ下しかば軍兵関東に参じて
四方の陣頭を驚かし平氏の一類
皆亡ぼしへ馳上りける入道相國の四男
本三位の中将重衡の卿ハ[illegible]
宣法皇の御遣ひとして日吉の社へ
参向ハ山門へまさ國々へ下しハ平家やま
せめんとて叡山をさしてせめ下しかば大衆
西坂本に籠りゐて支いかにもせん
義は纔参の人も心を合せ給はん

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-43　ガラス使用

廟もえ大にふ取どもらされけり又
叢らに般上人の中には偏りに関章
発ひで君氷時のの多かりけり山上
洛中の騒動斜ならず去程に京衛
の兄元也して法皇近へ衣奉て
敢へ還法し在りける一院山門の大衆
に仰せて平家追討せらるべしと聞
えしも平家又山攻めんとていひあへるも誤
方もなきことを言なりは天魔の所
業なるべしとぞ（下ワ）人申（ミ）ける
法皇御せなりけるハ（折声）かくのごとき
人ハいさしらず法皇御請なんど申すなるも

にもにハ任ずまじさるまゆへとぞ修せ
らる　指声　同じき九日の日二十二社へ
官幣使を立てらる是ハ飢饉疾疫に
よつてなり　口説　同じき五月廿四日
に改元ありて養和と号す其の日
除目行はれて越後の国の住人城の

四郎助茂越後の守に任ず兄助長逝
去の間不吉なりとて頻りに辞し申し
けれども勅命なれば　コハリ　力及ばず
まて是によつて助茂を長茂と改名
指　さる程に九月二日の日越後の国の
住人城の四郎長茂越後の守に任ず

朝恩の忝さに木曽追討のためにとて
越後出羽会津四郡の兵共を引率
して都合其勢四万余騎信濃国へ
発向す木曽ハ其比依田の城にありけ
るが是を聞いて三千余騎て城を出て馳
向ふ同じき九日の日当国横田河原に陣
をとる木曽殿の方より井上の九郎
光盛が計に赤旗七流造り
出し三千余騎を七手にわかちあそこの峰
爰の洞より寄せければ越後の勢共是
を見てハ此国にも平家の方人ありけるとて
いさみ悦ぶ所に次第に近付て旗さしあげば相

謀し定めて赤旗ども皆かなぐり捨て
兼て用意したりける白旗をさつと
指上たりけれバ越後の勢ども是を見て二八
たゞろきまどひけりとてあわてふためきける
が或ひハ河へ追はめられ或ひハ悪所に
追落されて助かる者ハ少なく討るゝ者ぞ
多かりける　白声　城の四郎が頼み切
たる越後の山の太郎会津の乗丹房
なんど云ふ一人当千の兵ども皆そこにて
本房に討れまいらせぬ、我身手負からき
命生きて河に伝ふて遁て越後の国へ
引退く飛脚を以て此由都へ申しければ

平家の人々ハ少しも騒がさりけり
しかれバ同じき十六日前の右大将宗
盛の卿大納言に還着し給ふ十月二日
乃日内大臣に成りて頓て同じき七日の日
悦び申の有りしか公卿ハ花山の院の中
納言兼雅の卿を始めとして十二人扈
従して参り給ひける蔵人の頭親宗
以下の殿上人十六人前駆す中納言四
人三位の中将も三人まで加ハりき東
宮小宮の源氏の嫡のでうくかれまりの公
只今都へ乱逆入りし中乃逆元平家の
人々ハ風の便にも人従の立寄る人もなかり

かゝる年ふまなりしありし養和は暮く
ひとひおもみぞ見えし去程に今年を
あらためて寿永二年に（バウヱ）なりにけり
（口説）節会以下常のごとし正月廿日
の日主上院の御所へ行幸なりて同じく十二日朝
覲の行幸有り是ハ鳥羽の院六歳
にて朝覲の行幸其の例とぞ聞
えし二月廿一日宗盛公従一位し給ふ
其日頓て（コハリ上）内大臣をば上表せらる
是ハ兵乱つゝしみのゆへとぞ聞えし
（中音）南都北嶺の大衆熊野金峯山
の僧徒伊勢太神宮の祭主神官に至るまで

860
28
43

まで皆平家を背いて源氏に心を（由ろり）
通はしけり西海に宣旨を被下し此方
へ院宣を出されしかども院宣宣旨なれども
只一向平家の下知をのみもちゐ給ふ
陸は身すのはなりけり